

親子で楽しむ能ウォーク & 芋煮会しポート

★山田重昭

高安と能の取り合わせの意外感が興味を引いたのか、或いは昨年実施した「能楽師と行く河内めぐり」の印象が深かったのか。

市制六十周年を記念するYAO市民博の公式イベントとして、昨年十月十九日に行われた「親子で楽しむ能ウォーク」は、市政だよりに予告が出るや、申し込みが殺到、当日は定員四十名を大幅に超える六十名参加の大ツアーとなった。

近鉄服部川駅近くの公園に、朝九時三十分集合。スタッフはその一時間前に集まることになっていたのだが、早くもその時刻に参加受付があった。

高齢のご夫婦。高低差のあるコースなので心配したのだが、ハイキングが好きでよく出かけるとのこと。受付を済ませた。

ウォーキングのスタッフは当初八名。それに大阪経済法科大学の学生や有志の方が続々ボランティアとして加わり、十五名程に膨れた。参加者と合わせると総勢七十名を越える大変にぎやかな編成となった。

このため、途中の佐麻多度神社までウォーキンググループを二つに分けて行動することにした。

俊徳丸鏡塚の周囲に民家が立て込んでいて、古墳内部を見学する際の周辺への配慮でもあった。

この高安山麓を歩くコースは人気が高いようで、我々のグループの他にも、駅前と公園内でそれぞれ一グループずつ集まっていた。

出発に際して、解説の松江信一さんと能語りの山中雅志さんから鏡塚についてのお

話があった。

俊徳丸は伝説上の人物。高安の長者の子でありながら、継母に疎まれて失明し、四天王寺にて物乞いをする身となった。その後、俊徳丸を捜しに四天王寺を訪れた恋仲の娘と再会、観音菩薩の霊験で目も見えるようになり二人は結ばれ、幸せに暮らすというあらすじである。



観世流能楽師の山中雅志さん

これが謡曲「弱法師」では父と子の再会というストーリーに変更されている。

また、「攝州合邦辻」として歌舞伎の演目にもなっていて、古来広く親しまれた題材であることがわかる。

俊徳丸に因む場所も俊徳橋や俊徳道として地名に残っている。

一方、鏡塚は古墳時代後期の古墳で、いつからか俊徳丸伝説と結びつき、俊徳丸の墓とされるようになった。

六世紀の古墳がどうして中世の説話の主



解説の松江信一さん

人公の墓に比定されるようになったのか、その経緯を想像すると興味深いものがある。

十時にウォーキング開始。天候は秋晴れというには汗ばむほどの好天気。

一班の先導は山田。二班は郷土史に詳しい榎井さんをお願いした。二班は時間調整のため、十五分遅れで出発、服部川八幡宮へも立ち寄った。

松江さんと山中さんは語り手として、一行とは独立して行動していただいた。

参加者の構成を見ると、ウォーキングのタイトルどおり親子連れが目についた。これは昨年の河内めぐりではなかったことだ。

但し、最も多かったのはやはり中高年のグループ、或いは個人で、コース近隣のエリアからの参加が目立った。

中には大阪市から来られた方もいた。その内、住吉区からお越しのノルウェー人のご夫婦は、日本の伝統芸能である能に魅かれて参加したということだった。

学生スタッフの中にも韓国やベトナムからの留学生が参加してくれ、国際色豊かな編成になった。



在原業平歌碑の前にて

鏡塚の内部は入口が狭く、順番を区切って見学したが、それでも一班の見学が終わるまでに十分を要した。

流石に傍らで眺めていた山中さんも「これじゃ十二時到着に間に合わない！」とイライラしたご様子。

入口横には松本幸四郎寄進の手水鉢や六代目尾上菊五郎寄進の灯籠石もあり、こちら参加者の注目を浴びていた。

佐麻多度神社にて二班は合流。ここから先は七十人の大移動が開始。次第に列が伸びてくる。

玉祖神社までは全員が集まることがないため、おと越道や芝塚古墳跡などの解説は、松江さんが全員が行き過ぎるまで、その場所に留まって繰り返し行なうといった形になった。

最後尾の解説が終わると同時に、松江さんは先頭が歩いている所まで走ってきて次の解説に移るといった具合で、山麓の傾斜道、息も絶え絶えといった感じで、参加者からは「ゆつくりしてください」と心配する声も挙がった。

道中は静かさが宿る集落の中から一転、河内平野を一望する田園地帯へと変化し、



玉祖神社

特にこどもたちが大はしゃぎだった。同じ八尾市内といっても、普段は見慣れない光景なのだろう。

ケイトウの花の色鮮やかな赤も印象深い。玉祖神社にて再び山中さんによる能の解説があった。

在原業平の高安通いのこと。「伊勢物語」で余りに有名な第二十三段。その話を下敷きにした謡曲「井筒」。この日の午後から「心合寺山古墳もけいの広場」にて演じられる能舞台の前説にもなった。

山中さんや学生スタッフらとは、この玉祖神社にて別れる。能舞台の準備のため、一足早く会場へ急ぐのだった。

鬱蒼とした森や楠の大木など、太古の香りを感じさせる境内で思い思いの時間を過ごした後、業平が通ったという高安の女が住んでいた茶屋の跡（神立茶屋の辻）と業平の歌碑に向う。

この道は奈良県に抜ける十三峠へと続く道。上り坂が一層きつくなった。

一番乗りで服部川に現れた老夫婦が最後尾で、かなり苦しそうにしておられたので、声をかけたが大丈夫という返事だった。言い忘れたが、ここまで「家庭の日」の

ノボリを道中掲げてついて来てくれたボランティアスタッフの方は虫や草木と格闘しながら現れた。

歌碑からウォーキング終点の里の風まではひたすら下りとなる。芋煮会の昼食時間までは残り二十分。歩く速度が少し速まった。

一旦まとまった列は登りのとき以上に伸び始めた。ここまできると、皆思い思いの行動をとり、途中で野菜を売る農家があると、中に入って品定めをしたり、風景写真を撮ったりしていた。

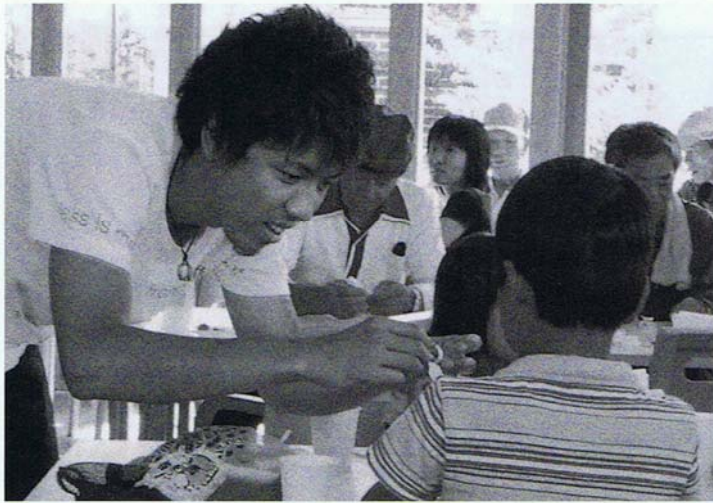
里の風到着は予定通りの正午。既に竹内さんを始めとするMOAのメンバーが芋煮の準備を終え、待っていた。

芋煮会からの参加者は既に食事を探っていた。我々一行も、到着した人から順に芋煮の列に並んだ。

ここで後方のスタッフから連絡が入る。先ほどの老夫婦だが、下りでご主人が動けなくなったので自動車を回して欲しいとのこと。

慌ててスタッフ間に連絡を取り、クルマの手配をした。ヤキモキしたが、自動車に乗ってご夫婦が無事里の風に到着されたときはホッとした。

常にご夫婦の側につき、適切な判断と指



こどもたちに人気のお兄ちゃん、ボランティアの田中君



芋煮を作っていたいただいたMOAの皆さん



芋煮

示を出した守田さん、泉さんには感謝申し上げる次第である。

三十分ほどかかったが全員無事に到着。こどもも大人もみんな喜んでくれたようだ。

前は参加者から、能と地元の意外な関係の深さに、地域を見る目が変わったとの声があったが、今回はどうだったのだろうか。

里の風は障害者の授産施設。二〇〇四年四月にオープンした。

ソーラーシステムを導入した施設は、木の温かい雰囲気とゆつたりした廊下、広いテラスと、エコロジーにも十分配慮した気持ちの和む場所だ。通所メンバーが作ったケーキやクッキーを販売する工房もある。ここで早朝からMOAの皆さんはがんば

って芋煮を一七〇人分用意してくれた。大き目のサトイモはポリウムたっぷり。ウオーキング後の疲れと空腹感を十分癒してくれた。美味しい芋煮を食べながら、八尾マジッククラブによるマジックを拝見。程よい疲れと午後からの芝能への期待感で、舌応なく盛り上がった昼のひと時だった。皆さん、お疲れ様でした！